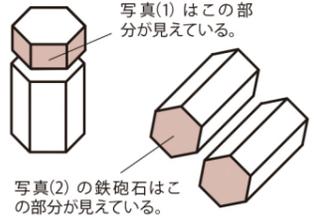


裏路地探険

玄武岩と赤い石が並ぶ
まち並みは、まるで
石垣の美術館。
塩と水との戦いの歴史
をひもときながら
赤石を歩く。



石垣の積み方も多様で、様々な表情を見せてくれるのがおもしろい。石垣の美術館のよう。



160万年前の火山活動によって形成された国の天然記念物「玄武洞」。規則正しい六角形の柱が並ぶ柱状節理は圧巻で、山陰海岸ジオパークの代表的なスポットとして多くの観光客が訪れている。

その玄武洞がある豊岡市赤石は採石で発展した集落だ。赤石の地名の由来は「赤い石」がとれたから。まさに石のまちだ。

昔、玄武洞公園周辺は30ヶ所以上もの採石場が点在していたという。その中でも玄武洞は大規模な採石場の1つだった。江戸時代の観光案内「但州湯嶋道中独案内」には「珍しい石をとる採石場があるので見に行ってみては」と紹介されている。

玄武洞ミュージアム館長の田中栄一さんは、昔の写真を眺めながら「赤石は採石が有名ですが、実は塩と水

との戦いの地だったんですよ」としみじみと話す。その写真は昭和40年に行われた土地改良工事の様子だ。

赤石の田んぼは集落を流れる円山川の水位より低い位置にあり、多くの田が常に湿地のような状態であった。腰まで水に浸かつて農作業をし、水路に船を浮かべて行き来していたそうだ。

集落を流れる円山川はこの辺りから河口までは汽水域となるため、毎年6月頃になるとその水が逆流し、田んぼが塩水に浸かってしまい米が作れなくなってしまう。公園に建てられた記念碑からは、土地改良工事の完成が赤石の人々の悲願であったことが伺える。

水害の多い地域だった面影は民家の石垣が物語っている。赤石のまち並みの特徴は、玄武岩で積まれた立派な石垣だ。低地にある民家の石垣は高く、山側へ行くほど低く積まれていく。玄武岩の石垣の中には、地名の由来となった「赤石」の石積みも見られ、そのコントラストが集落の美しい景色を作り出していた。集落の奥に鎮座する兵主神社でも敷石として玄武岩がふんだんに使用されており、参道横には赤石がゴロゴロと転がっている。石のまちならではの付まいをいたるところで見ることが出来る。

「この辺りも昔は水路でした。地区ごとに船付き場が4ヶ所ほどあり、川魚が本当によくとれました」とは、区長の稲葉政弘さん。魚をとったり、池や沼地に生える菱の実を船でとりに行き、おやつとして食べていたという水郷らしいエピソードを懐かしそうに話してくれた。



麓の家の少し上のあたりにも、昔は民家が多く建ち並んでいたそう。「今でも屋敷跡がたくさん残っていますよ」と田中さん。



民家の石垣で見られる赤い石の積み石。周りの黒い石は玄武岩。

なるほどポイント

玄武岩の積み方にも種類があり、岩のどの部分が見えるかで表情が変わってくる。写真(2)は鉄砲石と呼ばれる長い玄武岩で造られている。玄武洞の玄武岩は天然記念物のため、現在は持ち出し禁止となっている。



写真(1)はこの部分が見えている。
写真(2)の鉄砲石はこの部分が見えている。



お千度参りで使用する竹串。
兵主神社境内に見られる赤石。



参加者募集休止のお知らせ

次回予定：新温泉町清富

新型コロナウイルス感染拡大の状況を考慮し、参加者の募集はしばらくのあいだ休止とさせていただきます。募集を再開する際には、こちらの募集欄にてお知らせいたしますので、ご理解のほどよろしくお願いたします。皆さまにお会いできる日を楽しみにしております。

赤石地区の昭和30年代頃の様子。船に乗って田んぼを行き来していた。うなぎなどの魚もよくとれていたそう。